地方総合

各地の話題

ヒマワリは人が集うポイント

地域が元気になるために尽力

鳥取市　みどり農産

【鳥取】70㌃の畑でヒマワリを栽培しているのは、㈲みどり農産の山崎俊宏社長はじめ従業員たち。みどり農産は鳥取市気高町に事務所を置く、38㌶のコメ作りを中心とした農業法人だ。山崎社長は「地域と農業を笑顔でつなぐ」を企業理念として、地域に根付いた経営を続けている。



ヒマワリ畑を案内してくれたみどり農産の正野奈津子さん

近年はスマート農業や圃場の大区画化による省力化、効率的な農業をめざす傾向が強くなっているが、山崎社長は圃場に直接出かけ、何げない日常の中で地域の人と話をしながら耕作をしていくことが大切と、人と人とのつながりにこだわっている。

ヒマワリ栽培は今年で9年ほどになる。この地域に人が集うきっかけになればと始めたが、金もうけのためにやっているわけではないので楽しくなければ続かない。

鳥取道から北側に見える畑一面にヒマワリが咲き誇る様子を、近年通りすがりにわざわざ見に来てくれる人が増えてきた。それが地域のにぎわいにつながり、来場者がSNSなどを通じて、情報発信をしてくれることで情報の拡散にもつながっている。

この地域も少子高齢化の波は避けて通ることができず、徐々に地域内のネットワーク機能が低下してきている。山崎社長は「地域が元気になるためには何でもやってみたいし、やっている本人が、ワクワクしなければ、参加してくれる人に気持ちが伝わらない」と言う。「自分も後期高齢者の域に入ってきた。今後はヒマワリで人を呼び、周辺に植えたトウモロコシなどで収穫体験ができるように、未来志向で『農業』を通じて地域へ貢献していきたい」と日焼けした顔をほころばせながら話した。

建設業から転身し無農薬野菜を直販

耕作放棄地を再生、土づくりにこだわる

兵庫 加古川市　瀧尻将司さん



耕作放棄地を再生した畑で瀧尻さん

【兵庫】加古川市で農業を営む瀧尻将司（まさし）さん(47)は17年ほど建設業に従事してきたが、2023年から加古川市と播磨町の農地を借りて新規就農。現在、約1・3㌶でキャベツ・ハクサイなど150種類もの野菜を栽培している。

農家の出身ではない瀧尻さんが農業に出合ったのは6年ほど前。自宅のある播磨町内の知人の農地を借りて妻の麻里さん(44)と家庭菜園を始めたことだ。

以来、農業に魅せられ神戸市西区の野菜農家での研修を経て、農薬と化学肥料を使用せず「土づくり」にこだわった野菜栽培に取り組んでいる。また、25年からは加古川市の耕作放棄地0・5㌶を借り、知人とともに重機を使って農地を再生。就農以来「農耕民族」の屋号で姫路市や神戸市内のマルシェへも出品し、個別配達で旬の野菜セットを届け、飲食店にも納品している。

瀧尻さんは「消費者が農家に代金を前払いして農産物を受け取るCSA（地域支援型農業）を広め、農家の経営安定を図りたい」と抱負を語った。

露地野菜・米麦の土地利用型経営

品目選択と労働力のバランスが重要

香川・観音寺市　大西良平さん



外国人材とニンニクの出荷調整作業をする大西さん（左）



作業効率をいつも考えていると話す大西さん

【香川】観音寺市で露地野菜と水稲、麦を生産する若手認定農業者の大西良平さん(●)。他産業に従事していたがUターンし、親元での1年間の研修を経て2018年に親から経営を継承した。

周辺農地の耕作依頼から少しずつ規模が拡大。期間借地を含めると経営面積約20㌶に、レタス、ブロッコリー、ニンニク、スイートコーン、タマネギなどの野菜と、稲WCS、小麦などを組み合わせて経営を展開する。

労働力は本人、母親、特定技能の外国人材（現在は3人）。耕畜連携により、堆肥を使った土づくりをしっかりと行うとともに、稲WCS栽培も3㌶程度まで増やしている。また、農業者同士のつながりの中で複数の販路を確保してきた。

「作業効率を上げるためにどうするか、いつも考えている」と生産性の向上を強く意識する大西さん。そのために農機具は順次そろえてできる限り機械化し、省力化できる栽培方法も常識にとらわれず試してきた。特に、「品目選択と労働力のバランス」を重要視し、経営環境にも臨機応変に対応しながら、所得確保につなげている。

焼酎で安納芋の可能性広げる



「尾鈴芋凰」を前に笑顔の吉井さん

【宮崎】「両親が使っていた大切な畑を守り、衰退する地元農業を救いたい」そんな思いを胸に都農町（つのちょう）で甘藷の栽培に取り組む「焼きいもひろば」（MTS農園）代表の吉井光孝（よしいみつたか）さん(51)。

吉井さんは、2015年から会社員の傍ら、安納芋を中心に甘藷の栽培に取り組んでいる。農家に転身してからは、「安納芋の名産地に負けないイモを育て、都農町を元気にしたい」と品質向上に努める中、その魅力をさらに広げようと試行錯誤。

安納芋を原料とした本格芋焼酎「尾鈴芋凰（おすずいもおう）」を生み出した。焼酎を通じて安納芋を農産物にとどまらない地元特産品として発信する。

「尾鈴芋凰」はふるさと納税の返礼品として受け取れるほか、「道の駅つの」でも購入できる。自ら育てた安納芋の可能性を広げる吉井さんの挑戦は、地元農業の活性化につながっている。

（都農町農業委員会）

イチジクが近鉄であべのハルカスへ

大阪　河南町・近鉄百貨店

貨客混載で朝採れを輸送・販売

【大阪】8月下旬から10月上旬にかけて、河南町産の朝採れ完熟イチジクが近鉄電車に乗せられ、大阪市内へ届けられている。河南町、近鉄百貨店、近畿日本鉄道、道の駅かなんが連携した取り組みは今年で3年目を迎える。

河南町と近鉄百貨店は、これまでも出張販売をはじめ、町産農産物を地域外に届ける取り組みに力を入れてきた。鉄道輸送は、町特産のイチジクを新鮮なまま売り場に並べる方法を関係者で検討し、実現したものだ。

毎週金曜日、道の駅かなんに集荷されたイチジクを古市駅から大阪阿部野橋駅まで貨客混載で輸送し、あべのハルカス近鉄本店内の「ハルチカマルシェ」で即日販売。傷みやすいイチジクを完熟状態で朝に収穫し、鮮度を保ったまま届けられるほか、既存の運行ルートを活用することで環境負荷の低減にもつながっている。

町と近鉄の担当者は「地元で知られているイチジクを、大阪市内など都市部の消費者にも広く親しんでもらいたい」と期待を寄せる。



初荷の8月28日、積み込まれるイチジク



朝採れが電車で運ばれたとPR

「経営は安定してきたが、今の最大の課題は気候変動への対応」と大西さん。「定植日の変更やBS資材の活用など試しているが難しい課題。今後も情報収集に努めながら改善を続けたい」と話す。

地元特産品として発信

宮崎・都農町　MTS農園・吉井光孝さん

進取の気性がビジネス動かす

農業×投資・共創テーマに農業フォーラム

知多半田市

【愛知】半田市は、農業をビジネスとして捉え、農業×投資・共創をテーマに7月15日、名古屋市内で農業フォーラムを開催。農業者、スタートアップ企業、金融機関などから約100人が参加した。

担い手不足や市民と農の距離の広がりなどの地域課題に対し、新たな価値と持続可能な農業の未来を探るため、地元農業者と企業、投資家が連携し、地域課題の共有と資金・技術・人材のマッチングを図ることを目的としたもの。

はじめに会場の起業支援拠点・ステーションAI担当の山田宰さんが、半田市はミツカンやカブトビールなど新しいことに積極的に取り組み、今ある資源を別の価値へ転換する「進取の気性」を持つと説明。次いで㈲エル・ファーム・サカキバラ代表取締役の榊原一智さん（酪農・肉牛経営）と半田市農政課長によるトークセッションがあった。

続いて、2025年度に農林水産省総合化事業計画の認定を受けた㈱おいしい村の末松園子村長と㈱NAORICEの近藤匠社長から事業計画の概要の発表があり、企業や金融機関に対し6次化商品の開発にかける熱い思いと今後の目標・課題を直接訴えかけるリバースピッチが展開された。

最後に発表した2社と同市6次産業化農業者支援プロジェクトリーダーの中野公雄さんでパネルディスカッションを行った。

中野さんは「農産物ではなく作っている農家を知ってもらうことが重要」「農家同士や企業がつながることでアイデアの具現化が進み、投資や共創が生まれる」と話した。



ナンバーワンをめざすと話す榊原社長（左）

水城跡に咲き誇る季節の花

花いっぱい運動が成果

福岡　太宰府市

【福岡】664年に築かれた特別史跡「水城跡」は、太宰府市と大野城市にまたがる全長1.2㌔の土塁だ。この周辺では、春には菜の花、秋にはコスモスが咲き誇り、毎年、多くの市民や来訪者でにぎわう＝写真。



太宰府市は、2001年から史跡景観の保全と史跡地の有効活用を図るため、水城跡周辺の休耕田3.1㌶を花で彩る「花いっぱい運動」に取り組んでいる。

農地の耕起や草刈り、播種などの作業は、市職員と市内農家ボランティアで組織する同市農業生産組織組合（松嶋稔会長、組合員23人）が担っている。

近年の酷暑の中、作業に励む組合員には疲労の色が見える。それでも活動を続ける背景には、「水城跡がこれからも人々の憩いの場であり続けてほしい。今年も花を咲かせて、みんなの喜ぶ顔が見たい」という、関係者一人一人の強い思いがある。